

小栗上野介も登場

中小坂と工業化の波

『鷺の笛』(たなか踏基氏著) 書評

日本の産業近代化に大きく貢献した幕末の奉行・小栗上野介が登場する歴史小説「鷺の笛」中小坂鉄山秘聞(たなか踏基氏著)が、今年1月に幻冬舎ルネッサ

ンスから発売されている。

群馬県甘楽郡の中小坂のあたりには鉄とわずかな金

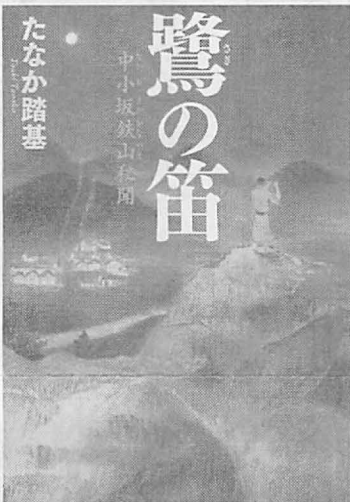
があつたが、戦国時代から刃物を加工するための砥石で成り立っている農村地帯だった。

しかし黒船来航以降、方針が佐幕か尊皇か、開国か

鷺の笛

中小坂鉄山秘聞

たなか踏基



攘夷に関わらず、西洋的な近代文明を取り入れようと幕府はもとより、水戸、薩摩、長州、佐賀など各藩が躍起になっていた。そのためには鉄の原料が必要

で、全国の鉱山の情報を求めて水面下での争奪戦となっていた。また、求められる鉄も今までとは質と量、それに伴い製法も変わっていった。

日本刀に必要な、砂鉄を原料とした古来からのたたら製鉄で作られる少量で高品質の玉鋼よりも、大砲、銃船、蒸気機関：工業化社会に移り変わってゆくには大量の鉄が必要となる。そのためには厳鉄から効率よく西洋式高炉で作ることが最良だった。

中小坂はその条件がそろった場所だった。厳鉄の豊富な山、そこに生える森林は幕府の御料地なので燃料には事欠かなかった。小栗上野介はここに目を

つけ、中小坂で掘削し、製鉄した後、横須賀製鉄所(後の造船所、造船専門でなく総合的な工場の面が強かった)に送って加工するという、長距離を輸送せずに済む生産ラインを目論んでいた。しかし、幕府側の計画ということが後世の評価を変えてしまった。

江戸から明治という時代の過渡期に一つの地域が幕府や藩、政府や商人達と時代に翻弄されてゆくさまが民衆の様々な視点で描かれてゆく著書となっている。